

豹変御曹司のキスは突然に

Sorami & Sakujiro

青井千寿

Chizu Aoi



エタニティ文庫

目次

第一章	偽 ^{いつはり} りの体は二つのキスで暴 ^{あば} かれる	6
第二章	傲慢 ^{ごうまん} 部下の仮面の下にあるものは	108
第三章	素肌に残された嫉妬 ^{あやむね} の傷痕 ^{きずあと}	218
第四章	繋がった運命のメロデー	275
書き下ろし番外編		
ハニートラップ		351

ひょうへんおんぞうし
豹変御曹司のキスは突然に

第一章 儼りの体は二つのキスで暴かれる

「美しい容姿に美しい名前。その上、仕事はできて会社仲間にも慕われる。まったく花園は完璧な女だな」

あれは入社三年目の夏。ビールで少し饒舌になった彼は、そう言つて私を誉めた。それ以来、彼の完璧でいたくて、私は背伸びし続けている。

だけどつま先が痺れるほど背伸びをしても、どんなに完璧な女性を装つてみても、心のどこかでは分かつていた。

偽物の自分では、満たされることなんてないつてことを。



社員食堂に向かう足を止めたのは、窓の向こうに秋空を見たから。

澄んだ青に、白砂を撒いたような雲。その様は仕事で行き詰まった脳を心地よく癒す。

スマホで時間を確認し、午後の予定を思い返す。営業に出るのは午後二時だから、時間には余裕がある。昼休みぐらい外の空気を吸おうと私は会社のエントランスに向かつて歩き出した。

『株式会社ソーシオン』本社ビルから外に出ると、昼食時のオフィス街は制服に身を包んだOLで賑わっている。

株式会社ソーシオンは、化粧品製造販売を行う、国内でも有数の大企業だ。その業務内容ゆえに、女性社員は全体の約六十パーセント以上。美を商売にしている以上、会社は社員に対し、ファッションをはじめトータルでの美意識の高さを求めている。働く者達もその姿勢に共感し、ほとんどが一定レベルの美意識を保持していた。

華美にならず、上品で清潔感のあるスタイル。総合職が勤務時に着用するスーツも、それをベースにすることが暗黙の了解となっている。当然、入社六年目の私、花園空美のクローゼットも、すっかりその手の服で埋まっていた。

まだ暑さの残る空気の中、時々利用する蕎麦屋さんに向かうため、私はヒールでアスファルトを蹴り早足で進む。冷房の効いた室内から眺める分にはよかったが、実際歩き出してみると九月の空気はまだ暑さに蒸れている。

そんな中で思い浮かぶものと言ったら、もうざる蕎麦しかなかった。

蕎麦屋さんに到着すると、予想通りそこには小さな行列ができていた。信州蕎麦が

美味しいこのお店は、昼食時にはいつも込み合う。だけどその列に、児島課長率いる営業二課の面々三人が並んでいたのは予想外だった。

「花園主任！ 社食だと思っていました！」

営業二課の若手、入社一年目のネモモが私を見つけて元気に手を振ってきた。

ネモモこと米田桃子は、ついこの間まで女子大生だったこともあり、まだまだ初々しさを湛えている。入社当初は派手さが目立つスタイルだったが、ここ最近ではファッションやメイクが清潔感溢れるものに変わってきた。彼女がこの会社の氣質を理解してきた証拠である。

「ご一緒していいですか？」

私は三人に笑顔に向けて訊ねる。

「もちろん」

そう答え、穏やかな笑みを浮かべたのは児島京平課長、三十九歳。私の上司だ。年齢を重ねた渋さと垂れ目の甘さが同居した顔立ちの、営業二課が誇るイケメン課長である。いつものように、私の胸がドキリと鳴る。午前中のミーティングですつと顔を突き合わせていたにもかかわらず、私は秋空の下で見る課長の微笑みに思わず見惚れた。

彼はいつだって笑顔で、私はいつだってその笑顔の虜になる。が、次の瞬間、私の幸福感は一瞬にして打ち砕かれた。

「花園主任、口が開いていますよ。ほーっとしてどうしました？」

児島課長の隣に立っていた宍戸朔次郎にからかうようにそう言われ、私は慌てて口を閉じると、すぐににつこりと笑みを浮かべる。

「暑いせいで喉が渴いて、口が開いただけ！」

「へえ、そうですか」
「そうです」

宍戸君は眼鏡を太陽に反射させながら、口の端を皮肉げに上げている。私は堪らず視線を逸らした。

居心地が悪い……いつもそう。

彼といると、裸にされて心の奥まで見透かされているような気持ちになる。

この宍戸朔次郎という人物は実にややこしい。彼は私より数ヶ月年上の二十八歳だが、一応私の部下というポジションである。なぜ一応なのかというと、彼は入社三年目でありながら、曽祖父がソーシオン創業者という経営者一族の一人だからだ。おまけに入社前にはアメリカでビジネスを学んでいたという典型的な御曹司。現在のところ私の方が立場は上だが、彼にはそう遠くない未来にソーシオンの重役の椅子が用意されているので、普通の社員とはレベルが違う。

それだけでも正直扱いにくいのに、彼は時折なぜか意地悪な口のきき方をしてく

る——児島課長と私が話している時は特にだ。私はその度に対して苛立ちを募らせる羽目になっていた。

「お待たせしました。四名様どうぞ」

私達は案内された小さな四人掛けのテーブルに腰を下ろし、揃ってざる蕎麦を頼む。

私は水を飲みながら、対面に座った宍戸君をこっそり見て、ため息を噛み殺した。

ソーシヨン創業者ファミリーの一員でありながら、宍戸君ほど企業イメージとかけ離れた人物はいない。

彼の黒髪は営業職にはあるまじき長さで、襟足は肩に触れるほど長く、前髪は完全に目を覆い隠している。おまけに鼈甲模様のおつといフレーム付きのダサ眼鏡を愛用しているの、笑っているんだか怒っているんだか——いや、目があるのかないのかさえよく分からない状態だ。

その上、彼がいつも着用しているスーツは全然サイズが合っていない。肩が落ちてだらしないし、袖だつて長すぎる。幅広すぎるズボン、かの著名な喜劇役者のような滑稽なのだが、営業にそんな滑稽さは求められていない。皮肉のお礼に服装について小一時間ほど説教したいぐらいだ。

が、その度に彼は御曹司様なのだと自らに言い聞かせ、言葉を呑み込まなくてはならなかった。

やがてざる蕎麦が運ばれてきて皆で啜っていると、ネモモが可愛い声で話しかけてきた。

「花園主任、朝から営業一課で噂になっていましたよ。結婚目前までいつてた彼と別れたらしいって」

私は食事を進めながら、「あ……別れたの一月も前だけ……」と、いつものように適当に返事をする。同僚の前でこういうプライベートなことを訊ねてくる不躰さ、ネモモの若さにかかつては無邪気さに見えてしまふからすこい。

私とその「破局」について口にしたのは、二日前の飲み会のことだった。飲み会には女四人しかいなかったのに、妙齢の女性が集う職場ではこの手の情報が広まるのは実に早い。

「え、あの副操縦士っていう彼？」

箸を止めた児島課長が、眉をひそめて小声で言った。いかにも気の毒といった表情を向けられ、少し鼓動が速まるのを感じたが、私はいい女風の作り笑いでそれを隠す。

「お休み合わないし、彼もCAさんと遊んでいたからこれでいいんです。ストレスになるような関係、私には向いていないんですよ。それに新しい出会いもあったから……」

「クールだな」

「クールですよね」

私の答えに児島課長とネモモが口を揃える。

私が彼らの言葉に合わせてクールに微笑んでいると、宍戸君が長い前髪の向こうからこちらを見ていた。私の態度に何かおかしいところでもあったのだろうか？

訝しがる私の思いを読み取ったように、宍戸君はかすかに笑みを浮かべて言った。

「新しい出会いってどんな男ですか？ また副操縦士？ 宇宙飛行士とか？ それとも夢の国の王子様ですか？」

その言い方にまた含みを感じて気持ちが悪く立立つ。こっちは「失恋」しているのだから、もう少し紳士的な態度で接してもらいたいが、怒ってはこちらの負けだ。

「今度は普通の会社員の人で、まだどうするか検討中なの」

「そうですか、会社員なら僕と同じですね」

私の言葉に意味不明な答えを返して、宍戸君は再び蕎麦を啜った。

表情も変えずに淡々と食事をする様子は、ちっとも美味しそうに見えない。ホント、何を考えているのかさっぱり分からない人だ。

児島課長が場を和ませるように、ゆったりと微笑んで言った。

「ま、花園はモテるから別れても次に困らないよな。土日休みの会社員だったらデートもしやすいし、いいんじゃないか」

心に染み入る彼の笑顔から逃れるように、私は箸に視線を落としながら答える。

「はい。新しい出会いでまた新しい自分になれたらいいなって思っています」

「新しい出会いで新しい自分か。既婚者にはそんな自由ないから羨ましい限りだな」

無理やり引つ張り出した微笑で課長の言葉を受け止めながら、私は信州蕎麦を啜った。美味しいはずなのに味がしない。

私はいつものように、児島課長の左手の薬指に嵌るシンプルなプラチナリングに視線を彷徨わせる。時々磨いているのか、それは結婚五年目にもかかわらず、まだ眩しいほどに輝いている。

その輝きに魅入られたようにぼんやりしていると、私の思考に宍戸君の声が割って入ってきた。

「花園主任、また口が開いていますよ」

そう言った彼の声色は威圧的なほどに冷たい。私はその声を無視して、気まずさを振り払うように蕎麦を口に運んだ。ここで何か言い返しでもしたら、上司としてあるまじき発言をしまいそうなのがする。これでも社内では、クールなビジネスウーマン「素敵な上司」で通っているのだ。それに、無駄に大きなバックを持つこの男に反抗するのは得策ではない。

なのに宍戸君はまだ絡んでくる。

「僕もぜひ新しい花園主任を拝見してみたいです。本当に新しい出会いで新しい自分に

なれたらいいですね」

「……ご覧にいれられるよう努力します」

もう何なの。こんな時に限って彼は営業らしい、とてもいい笑みを浮かべている。六戸君が言葉を発する度に嫌みつたらしく聞こえてしまうのは、私だけ？

ただ、正直に言えばこのおぼっちゃん、仕事はしっかりできていて、ミーティングで時々ハツとするような発言をしたりと、侮れない部分も多くあるのだ。油断していたら足をすくわれる気がして、いつもソワソワしてしまう。

そして、一緒にいればいるほど私の「内面」を覗かれてしまいそうで……

できることなら一緒に働きたくない人間、ナンバー1。

だけど私は「素敵な上司」として我慢するしかないのだ。

彼は二十五歳で中途入社した時から、将来の道が決まっている。三年ほど営業職を経験した後はマーケティング部へと異動し、時期を見て役員入り。

噂によると六戸君の父親である現社長と、兄にあたる長男の六戸洋太郎ようたろう常務が経営方針の違いで揉めているらしく、その仲裁役にと周りの重役達が次男の六戸朔次郎を中途入社させたのだという。

こんな人間が仲裁役になれるかどうか大いに疑問なのだが、末永くこの会社でお世話になるためには、この六戸君とも仲良くやっていくことが必須である。

ダサ眼鏡でも、喜劇役者スーツでも、性格に問題ありでも、一応上司として当たり障りなく仕事を共にし、彼がめでたくマーケティング部へ移る日には、満面の笑みで営業部から蹴り出した。

この日の終業後、軽い残業を終えて帰宅しようとしていた私は、立ち寄った社内パウダールームで経理部の女性陣に声をかけられた。

化粧品会社ということで、トイレの隣にはパウダールームが併設されている。休憩時間や終業後は女性達の溜まり場となりがちだった。

「花園主任、私達、七時半から研究所と合コンなんです。でも人数足りなくなっちゃって……もし今晚空いたら、来てもらえませんか？」

顔見知りの女性社員が愛想よく言う。彼女は恐らく二十代半ばだろう。入社三年目あたりのこの年齢層が一番プレ婚活——つまり婚活の前段階、結婚を視野に入れた男性を捕まえるのに忙しい。

化粧品の研究開発せけんを行っている研究所は口下手な理系男子ばかりだが、医療関係の資格を保持している者が多く、給料もいい。まさしく未婚の女性社員に狙われやすい部署である。

彼女としては自分より若い子は誘いたくないので、私ぐらいが適任と考え声をかけた

のだろう。

通常なら美味しい合コンのお誘いではあるが、私はにっこり微笑んで答える。

「誰かに聞いたんでしょ？ 私が彼と別れたって」

「男達が噂してましたよ。フリーになったらしいって。花園主任を狙ってる男性社員は多いですから」

「お世辞はありがたく受け取っておくけど、私、社内恋愛は避けているから今回はパスするね。それにこれからデートだし」

私は時間を気にするそぶりでスマホを取り出し、ディスプレイをタップする。だけ私の目はディスプレイなど見ずに、スマホケースに無理やり取り付けた古い携帯ストラップの先を見ていた。

彼がくれた携帯ストラップ。貰った時には三つ付いていたクリスタルは、いつの間にか残り一つになっている。後の二つは失くしてしまった。今では会社を出る直前に、いつもこうして最後の一つがそこにあるか確認するのが私の日課のようになっていた。

「花園主任、もう次いるんですか？」

探りを入れてきた甲高い声に対し、私は上品な笑顔で肯定してみせる。

そしてこれ以上詮索される前に、颯爽とパウダールームを後にした。

一年間付き合ったちよつと浮気性の副操縦士。その前は一コ下の広告代理店勤務。あの時は、彼のマザコンが原因で別れたんだっけ。次の彼はどんな男にしよう。

マンションの部屋で一人、私は自社の新製品であるマニキュアの蓋を開けながら考える。

今回の商品はマニキュア独特のきつい匂いがしないのが特徴らしい。鼻を近づけてみると確かにそれほど強い匂いではなかった。

塗りやすさを確認しながら、私は足の爪にそれを塗っていく。

手の爪は数日前にネイルサロンでフレンチネイルにしたばかりだ。ネイルも営業先での商品紹介に使えるので、私は自社製品をサロンに持ち込んでプロに仕上げてもらうようにしている。

ただし仕事に見せることのないペディキュアは、いつも自分でしていた。

私の足は長年ハイヒールを履き続けた影響で、足の小指と薬指の爪が割れて醜い。その上、親指以外はハンマートゥで変形しており、人様の目に晒すのも恥ずかしい状態だ。

——美しい容姿に美しい名前。その上、仕事はできて会社仲間にも慕われる。まったく花園は完璧な女だな。

私はこの三年間、何度も記憶から引つ張り出した言葉を思い出す。

完璧な女？

「完璧なんかじゃない……」

私は、たくさんのぬいぐるみ達に囲まれて座る。じゃむじゃむに向かってつぶやいた。じゃむじゃむは一メートル大の巨大な熊のぬいぐるみ。私に彼氏がいるとすれば、このじゃむじゃむだけだ。

そう、本当は副操縦士の彼氏なんていない。だから別れてもいない。

その前の彼氏も、次の彼氏も、全部、全部、ぜんぶ、嘘っぱちだ。当然、私は正真正銘の処女。

クールなビジネスウーマンの正体なんて、こんなもの。

会社ではそこそのポジションにいて、アラサー。容姿も出来るだけ綺麗に見えるよう整えている。そんな女、適度に彼氏がいることにしといた方が周りも納得してくれる。もしかして処女なのかなんて勘ぐられたら、恥ずかしさと情けなさで入社拒否にでもなりかねない。

改めて考えてみれば、私はとことん恋愛体質ではないと思う。

合コンは好きじゃないし、その上、なかなか恋に落ちることもない。ただし一度落ちれば一気にズドンと落下して、浮上することができない。

このじゃむじゃむにしても、高校生の時に友人グループから誕生日プレゼントとして貰ったもののだが、そのグループの中に好きな男の子がいたからこそ後生大事にして

きたのだ。

そして、この古い携帯ストラップも同じだ。

ストラップ部分は千切れて短くなり、装飾のクリスタルは一つとなり、それでもスマホケースに無理やり穴を開けて使っている。これは、入社一年目のホワイトデーに、彼が義理チョコのお返しにとくれたものだった。私にとってそのチョコは、義理のフリをしたものだったのだけれど。

営業部第二課、児島京平課長……

高校以来、恋した相手が既婚者だなんて、自分が嫌になる。

私の入社当時、彼はまだ独身で、決して要領がよい方ではなかった私を辛抱強く育ててくれた。私が失敗した時は、一緒に営業先で頭を下げてくれたことだってある。

彼に迷惑をかけたくないと必死に仕事を覚え、彼に認められる度に仕事が楽しくなった。

やがて自分が児島課長に恋していると気が付いたのと、彼がソーシヨンの受付嬢と婚約していると知ったのはほぼ同時だった。

片想いにも到達しないような、出来損ないの恋。

行き所のない恋は誰にも知られることなく私の心で腐り、その間に児島課長は宝石のように輝く美しい花嫁を手に入れた。彼のスマホの壁紙が奥さんとのツーショット写真

であることも知っているし、最近はお子さんを欲しがっていることも耳にしている。ラブラブな夫婦の間に割り込んで、どうこうしたいわけでは断じてない。だから私は、いつだって児島課長の前では架空の彼氏の話をして、架空の素敵な恋愛を楽しんでみせている。

——まったく花園は完璧な女だな。

入社三年目、営業として大きな仕事も狙えるようになった私にそう言った彼は、私の本当の姿など知る由もない。本当の私は、いい歳しながらも処女で、歪んだ片想いを捨て切れない重たい女だ。

——新しい出会で新しい自分になれたらいいですね。

突然、宍戸君の淡々とした声色が耳底から響いてきて、私はびくりと体を震わせる。私の何を知っていてあんな口をきくの？ 何で私が言われたくないことばかり口にするの？

もう！ 宍戸朔次郎、だいつ嫌い！

「あ……」

ふと私は、あと二週間ほどすれば自分の誕生日であることを思い出し、思わずため息を吐き出した。

もうすぐ二十八歳。

新しい出会い、新しい自分、か……

二十八歳の私は、何か変わることができのだろうか？

それともやっぱり歳だけ重ねて、中身は何も変わらないまま？



「あ、宍戸君、待って。そのミストスプレーに試供品貼り付けるから」

私は宍戸君が陳列しようとしていたスプレータイプの化粧水を取り上げて、その瓶に美容液の小さなサンプルを貼り付けていく。

普段はお腹の中で悪態を吐いていても、仕事ではあくまで、素敵な上司でいたい。

「このタイプの化粧水は秋になったら一時的に売り上げが落ちるでしょ。本格的な冬が来たら、肌が乾燥するからまた売り上げも回復するけど、その間のフォローと冬商品の売り込みを兼ねて試供品をプラスするの。女性って小さなオマケに釣られちゃうから、こうすると結構商品が動くんだよね」

「そうですね。ありがとうございます」

彼は素直に同意すると、試供品付きのミストスプレーを受け取って棚に並べていった。近日中に宍戸君の担当地域に新しくドラッグストアがオープンするので、今日は彼と

二人でオーブン準備の応援に来ていた。新店への応援は、販売企業との信頼関係を築く大切な仕事だ。

私の現在のメイン業務は、百貨店などに派遣する美容部員の取り纏めなのだけど、今日の仕事はドラッグストア担当である宍戸君のフォロー。以前は私が担当だったが、宍戸君に丸々引き継いでもう二年半になっていた。ドラッグストアでの仕事は久々だ。とはいえ、仕事の要領は心得ている。

「花園主任、その棚の日焼け止めところに夏ポップをお願いします」

私が秋冬用のスイングポップを棚に取り付けていると、宍戸君が夏用のポップを差し出しながら言う。見れば、ヤシの木のイラストと共に『陽射しと戦え!』とのアオリ文句が書いてあった。

九月中旬にこれはないんじゃない? と訝る私に、彼は淡々と説明し始める。

「新店オープン後しばらくは、天候を見てポップを変更するようにしてるんで、とりあえず今はそれ付けといて下さい。今の時期、夏の初めに買った日焼け止めがなくなるから、買い足す人が多いんです。それに、他社も夏商品の売り場を縮小してきますから狙い目です」

眼鏡の向こうで無表情に言われ、私は言い返すのを止めた。

鋭い。言われてみればその通りだ。こんなことに気付かないなんて、上司として面目ない。
マニユアル通りに動くなら誰でもできる。ユーザーの動きや天候の変化を読んだ柔軟な営業力が大切——そう彼に教えたのは私ではなかったか。

宍戸君は淡々と仕事をこなしているように見えて、その裏で繊細な思考を張り巡らせている。こうやって二人で仕事をしていると、悔しいけれど感心することも多い。

私はこっそり宍戸君を窺い見る。ジャケットの肩部分が体からずり落ち、相変わらずだらしない。

けれど不思議だ。宍戸君はこれだけ繊細な仕事ができるのに、どうして服装や髪型にここまで無頓着になれるのだろうか? 単に服装センスが壊滅的なだけ?

わざとダサく装うはずはないし……一緒にいればいるほど釈然としない気持ちになる。「花園主任、その脚立、不安定なので上段は僕がやります」

一番上の棚に在庫を並べようと小さな脚立を持ち出してきた私を見て、宍戸君が言った。

脚立を立ててみれば、確かにグラついている。

「大丈夫。そんな高い場所じゃないし、少しだけだから」
彼の申し出を断って私は脚立に上った。

今日は搬入時に台車の車輪が外れるというトラブルに見舞われていた。そのため、宍

戸君が「僕が持ちます」「僕が運びます」と言って力仕事を買って出てくれていたのだ。彼はいつもの淡々とした態度だったが、このままではさすがに上司として立場がない。彼の普段の態度がアレなだけにできれば頼りたくない、無意識につまらない意地を張ってしまったのかもしれない。

脚立きょたつに上り、上の棚に商品を置こうと手を伸ばした途端、足元が大きく揺れた。慌てて足を踏ん張ったけれど、不安定なヒールが小さな足場を踏み外す。

「きゃっっ！」

体が宙に放り出されると同時に、足元で大きな音がして脚立が倒れた。

スローモーションのように自分の体が床に吸い込まれていく。私は硬いフロアに打ち付けられるのを覚悟した。

が、私が背中から着地したのは、柔らかく弾力のある場所だった。

それが宍戸君の胴体だと気が付いたのは、目を開いた瞬間、眼鏡の奥にある彼の瞳と出会ったから。顔は思い切りしかめられているのに、レンズの奥にある瞳はどこか私を心配してくれているようにも見えた。

「ご！ ごめん、ごめんなさい！」

彼の腕が、守るようにそっと私の腰に添えられている。

私は恥ずかしさで頭がいっぱいになり、慌てて立ち上がる。宍戸君、私から少し離れ

た場所にいたはずだけど……もしかして咄嗟とっさに駆けつけてくれたのだろうか？

「……怪我はありませんか？」

「し、宍戸君こそ……私、重たかったですよ」

男性の存在をこんなに近くに感じたせい、私の心臓は羞恥しゅうちで高鳴っていた。

「重さとはかく、もう一回受け止めるのは遠慮したいので、その仕事は大人しく僕に任せて下さい」

「ごめんね……」

羽根のように軽い体重でないことは分かっている、私はもう一度彼に謝罪する。

宍戸君は「もう謝らなくていいです」と素っ気なく言い、床に散らばってしまった商品を拾ってくれた。

小さく背伸びをして棚の最上部に在庫を並べていく宍戸君を見ると、案外身長が高いいんだと今さらながらに思う。

「あの、ありがとう。助けてくれて」

謝罪はしたけれどお礼がまだなことに気が付いた私は、乱れた服装を整え、改めて言った。

「ただ、もう宍戸君はこちらを見向きもしない。」

「意地を張らず、たまには素直に僕の言うことも聞いて下さい」

背中であっさりほうに言った彼の言葉に、またしても反論ができなかった。

商品陳列の作業が終了したのはそれから一時間ほど経ってから。窓の外の景色はすっかり夜へと変わっている。久々の作業で体はジワジワと疲労し始めていた。

「私の方はこれで完了かな。宍戸君は？」

「はい、僕も完了しました。後は店長のところに挨拶に行つて終了です」

空になった段ボールを片付けて作業終了を確認した私達は、二人で新店の店長のもとに向かう。

だが、その後ドラッグストアを出たのは、さらに一時間も経つてからだつた。

開店準備に追われドロドロに疲れている店長を見て、宍戸君がトイレットペーパーの積み上げや大量のゴミ捨てなどを手伝い始めたからだ。彼は私に対し、これも力仕事だから手伝わなくていいと言ったけれど、上司としてはそういうわけにもいかない。

結局遅くまで宍戸君に付き合ひ、営業車の助手席に乗り込んだ時にはぐつたりとへばつてしまつていた。

もう夜の八時を超えているので直帰でいいだろうと判断し、私は宍戸君に駅に近いところまで送つてほしいと頼む。申し訳ないが、宍戸君には会社に車を返しておいてもらう。

滑らかに走り出した車の中で、私は思わず深く息を吐き出し愚痴つてしまう。

「あそこまでしなくてもよかつたのに……トイレットペーパーとかドリンクとか、他社製品なんだから」

「あの店舗、企業直営ですから店長も事業本部の社員なんです。本部に顔売つとくと、後々仕事がしやすいんで」

上司の不服に、宍戸君は車を運転しながら淡々と言った。

何というか……やっぱり仕事に対する嗅覚きゆうかくが優れていると認めざるを得ない。確かに本部の社員に気に入られると、全店舗共通キャンペーンやチャリ運動企画の提案も了承してもらいやすい。そんな企画が通れば、動く金額も大きいので、大金星だいぎんほしになるのは間違いない。

それにしたつて、彼のだらしない身なりはどうなのだろうと思うけれど。

そんなことを考えつつ、私は背もたれに体を預ける。

夜の街並みに黄色やオレンジの明かりが隣まなたくのを眺めながら、晩ご飯は何にしようと思ふ食べ物のことはかり考える。お腹は相当減つている。もう作るのも面倒くさいからコンビニにでも寄つて帰ろうかなんて考えていると、車は大通りを逸それて脇道に入つていった。明らかに近くの駅とは別の方向。

あれ？と思つている間に、宍戸君は慣れた様子で小さな路地を抜け、コインパーキングに営業車を停める。

「晩飯食いましょう。この近くに旨い店があります」

そう一言だけ告げ、彼は車を降りて歩き出した。

ちよつと待って！ 誰もOKなんてしてない！

……とツツコミを入れたところだけど、疲れているわ空腹だわで声が出ない。

宍戸朔太郎、嫌味っぽいだけでなく超マイペースというか……自分勝手！

普通「晩飯一緒にどうですか？」とか「何が食べたいですか？」とか、打診するのが先ではないだろうか？ 仮にも私は先輩だ。今のところ上司だ。後々は立場が逆転するとはいえ。

けれど、空腹で反論もままならない私には、彼の背中を追いかけるしか選択肢はなかった。

程なくして彼が扉をくぐったのは、一軒の古い居酒屋だった。お洒落感の欠片もない、うらぶれた個人経営の居酒屋。一部上場企業の創業者ファミリーが女を連れてくるところとは思えない。

「ここは牛すじ煮込みが旨いです。ビールに合います」

勝手に二人掛けのテーブルに陣取った宍戸君は無表情にそう言うのと、店員に自分用の親子丼を注文する。今日の運転手は彼だから、アルコールではなくご飯物なのだろう。

「飲みたかったら、車は私が会社に返しておくよ」

「僕が運転します」

私の提案を、彼は無愛想な一言で却下した。

上司として気を使つたつもりなのに、もう！

ここはアルコールの力を借りて苛立つ気持ちを落ち着け、お腹を満たして幸せにならねばと、私は牛すじ煮込みと大根サラダ、生ビールを頼んだ。

運ばれてきたビールを乾杯することなく、一人勢いよく飲み始める。ビール一杯で酔う体質ではないけれど、空きっ腹にアルコールが沁みていくのが分かった。

気持ちが落ち着いてくると、この居酒屋は古いけれど、決して寂れてはいないことに気付く。こんな小さな路地裏にあるのに、席は常連客らしき人達で埋まっているし、厨房から次々と運ばれていくお料理はどれもこれも美味しそうだ。

「宍戸君もこういう庶民的なところで食事するんだね……あ、美味しい」

ちよつと運ばれてきた牛すじ煮込みを口に運んだ私は、トロリと口の中で溶けていくお肉の美味しさに唸った。しっかりと味のしみ込んだ牛すじ煮込みは、ビールと一緒に食べると止まらなくなる。宍戸君の前に運ばれてきた親子丼も、卵の絶妙な半熟加減がすごく美味しそうだ。

思わず唾を呑み込んだ時、宍戸君が白い歯を見せて笑った。食い意地の張っているのを見られてしまった。私は慌ててビールを飲んで恥ずかしさを紛らわせる。

「この店、なかなか旨い(うまい)でしょ? ……花園主任の彼氏はもっと高級な店に連れていってくれるのかも知れませんが……宇宙飛行士だか会社員だかでしたっけ?」

俯(うつむ)いて親子丼を口に運びながら宍戸君が言った。

また意地悪な口のきき方だったので、私は少しムツとする。

『私は寛大な上司、素敵な上司』と自分に言い聞かせながら、再びビールを喉に流し込む。

「元彼は宇宙飛行士じゃなくて副操縦士ね。ま、確かにこういう場所はデートではなかなか来ないけどね」

「ま、僕も花園主任をデートに連れてきたつもりはありませんけどね」

そう言つて宍戸君は、顔を上げてこちらを見据えた。

「……あと、そういう嘘、いつかバレますよ」

もう一口と流し込もうとしたビールが、喉のあたりで止まった。

声が出ない。ビールが上手く飲み込めず気泡が口の中で不快に弾け、背中からは冷や汗が噴出する。

「花園主任、二年半一緒に仕事をしているんです。あなたの視線が誰を追つてるのかぐらい分かります。気を付けた方がいいですよ」

「なに……言つてるの」

やっと絞(しぼ)り出した声は掠(かす)られていた。眼鏡の奥からは強く厳しい視線が放たれ、私(わたし)を捉(とら)えて離さない。ビールどころか、もう水一滴も喉を通らないほどに私は動揺(どうごう)していた。

落ち着け、落ち着け。ポロを出すな。

彼に本当の自分を見せるわけにはいかない。剥(は)がれそうになるメッキを必死でかき集め、私はクールな花園空美(そらみ)を蘇(よみがえ)らせようと試みる。

だけど全てを透かし見るような彼の瞳(ひとみ)の前(まへ)にすると、そんな努力も空回りするだけだった。余裕(よこゆ)の笑みで否定してやろうと思うのに、私の口角はビクッと小さく痙攣(けいれん)するだけで上手く笑えない。

ぐるぐる、ぐるぐる、酔(よ)ったわけでもないのに、頭(かぶ)の中で宍戸君の言葉(ことば)が廻(まわ)る。——あなたの視線(しせん)が誰(たれ)を追(お)つてるのかぐらい分かります。

心臓(しんざう)が押し潰(つぶ)みされたように痛む。

入社(にゅうしゃ)以来、私の心をこんなに鋭(あま)く暴(あは)こうとする人間なんていなかった。みんな彼氏(かみ)ぐらい当然(たうぜん)いるだろうと思(おも)い、疑(うたが)うことはなかったのに。

「なに、言(い)つてるの」

息(いき)も絶(た)え絶(た)えに同じ言葉(ことば)を吐(つ)き出したが、やっぱり続きの言葉(ことば)が出てこない。

よりによって社長(しゃいち)の息子(むすこ)に知られるなんて……

この男(おとこ)には管理職(かんりしやく)を吹き飛ば(とば)すぐらいの力(ちから)はある。

何もやましいことはないけれど、いや、だからこそ変な疑惑を持たれて、児島課長に迷惑をかけるわけにはいかなかった。

そう思った次の瞬間、眼鏡の下にある唇が薄く弧を描いた。

「あ〜……花園主任。カマかけた程度でそんなに動揺するぐらいなら、くだらない嘘なんかついちゃダメですよ。……大当たりみたいですね」

そう言った彼の顔が酷く蟲惑的に見えて、私はドキリとする。

何よ突然。普段は笑顔なんて見せないくせに。

「児島課長ですよ。止めた方がいいですよ。不倫なんて女が得することは何もない」

「そんなんじゃない!」

私は反射的に立ち上がり、怒鳴っていた。

居酒屋に満ちていた和やかなざわめきがピタリと止まり、いくつもの視線がこちらに向けられる。私は慌てて座り直し、眼鏡の奥で鋭く光る彼の目を睨みつけた。思いのほか大きな目が眼鏡越しに私を見つめている。

私はできるだけ平静な顔で声を絞り出す。自分のプライドより、いつも優しい笑顔をくれる課長を守る方が大事だ。

「不倫とか、そんなんじゃない。児島課長には何も関係ないことだから……頼むから……」

私の言葉に反応して、宍戸君の表情がニヤリと歪む。

「頼むから黙っとけ? ……頼み事はタダじゃ無理ですよ」

伸びてきた彼の腕が私の手を掴んだ。次の瞬間、強い力で引き寄せられ、私は否応なしにテーブルの上で上半身を乗り出す羽目になる。

何もかもが一瞬の出来事。私は反射的に体を強張らせたが、宍戸君は腕を離してくれない。

「宍戸く……」

「まったく……そんな顔をされると……」

腰を浮かせた彼の体が近づいてくる。小さなテーブルがガタツと音を立て、空になったいたグラスが揺れた。

彼の眼鏡がどんどん近付いてきて、その奥にある瞳が私の視線とぶつかる。

その直後、私は宍戸君に唇を奪われていた。

私は抵抗するのも息をするのも忘れて、ただ一方的なキスを受け止める。

今、私の唇を塞ぐ温かく柔らかい感触が彼の唇だなんて信じられない。他人の体温が自分の唇に浸透していく感覚に、私はただ圧倒されていた。

やがてチュツと唇を吸われ、私は魔法が解けたように自分の置かれた状況に気が付いた。慌てて首を捻って唇を離し、無我夢中で彼の腕を振り払う。強く握られていると

思った腕は、あつけないほど簡単に解放された。私はへなへなと椅子に座り込む。

キス……キスされた。

そう理解した時、私は再び飛び上がるように立ち上がり、即座に踵を返して走り出していた。

客の注目を背中に集めながら、私は居酒屋を飛び出す。

彼から逃げなければという焦りに突き動かされ、私は夢中で来た道に戻った。パンプスガ打楽器のように鳴り響き、私の心臓もそれと同じほどに打ち鳴らされる。息苦しくて倒れてしまいそうだ。

パーキングに停めた車の前まで来て、車の鍵を持っていないことに気付いた私は、自分の愚かさにつくりと膝をつきそうになる。ここに戻ってきてどうしようというのだ。

「ああ〜！ もう、バカ」

一人自分を罵り、私は車の前で地団太を踏む。おまけに財布とスマホは持っているが、他の荷物は車の中に残したままだ。一体どこに向かえばいいのかと、混乱した頭で周囲を見回してみるが、見えるのは夜の闇ばかり。私は途方に暮れてしまう。

そうしているうちに地面を蹴る音が近付いてきた。穴戸君が追いかけてきたのだ。

彼は私の姿を確認すると立ち止まり、ふう、と息を吐き出して長い前髪をかき上げる。闇の中では彼の表情はよく見えない。ただ、柔らかな髪が夜風にそよぎ、前髪の間

から夜の闇を反射する眼鏡が私を映しているのが分かった。

「……送ります」

彼はそう言って車のロックを解除した。

「一人で帰る」

「……一人で帰れるんですか？ ここがどこかも分かっていないでしょう？ ……すみません。失礼なことをしたのは謝罪します。きちんと家まで送るので乗って下さい」

そう言った穴戸君の声は、いつもの淡々としたものだ。そう、さっきのキスなど、なかったみたいに。

彼は助手席のドアを開け、私が乗り込むのを辛抱強く待っていた。

少し冷静になった私は、大人しく助手席に乗り込んだ。

キスぐらい……うん、キスなんて何年ぶりだろう。

夜風が唇の表面を撫でたと同時に、私は穴戸君の唇の感触を思い出す。

自分の下から追いつきたいと思っていた男の唇はうるたえてしまうほどに柔らかくて、あんな強引なキスなのにどこまでも優しく……ああ、もう！

あのキスの瞬間、何か不思議な力に囚われた気分だった。私は抵抗できなかった自分を思い出し、再び一人悔しがる。

そんな私の葛藤など知らない穴戸君は、私の住んでいる街の方角を確認すると、サイ

ドブレーキを解除して無言で車を走らせ始めた。

しばらく行くと、窓の外に見慣れた景色が映り始める。もうすぐ家も近いと思うと、次第に高ぶっていた感情も風いできた。

すると改めて、先ほどの居酒屋での彼の言葉が気になり始めた。彼はきっと、私と児島課長との関係を誤解している。

私は一つ息を吐き出して、背筋を伸ばす。一度剥がれてしまったメッキで自分を包み隠すかのように気持ちを入れ替えた。

「宍戸君、誤解されたら困るからもう一度言っておくけど……児島課長とは本当に何も無いの」

私が前を向いたままそう言っても、宍戸君は黙っていた。彼もまた、ただ真っ直ぐに前を向いて運転している。

車はヘッドライトに浮かび上がる道を滑らかに走り続けていた。いつもはぴったり額に張り付いている彼の長い前髪が、少し乱れている。きつとさつき走ったからだろう。

宍戸君が道路標識に視線をやり、ウインカーを出して右折する。

「どのあたりで停めたらいいですか？」

「駅前で降ろして。そこから近いから」

彼は無言のまま駅前に向かって車を走らせる。やっぱり何を考えているのか分からない

い。私は二人の間にある静寂に、焦燥感をかき立てられた。

沈黙に耐えられなくて、私は何かを取り繕うように話し始めていた。

「児島課長は仕事で色々お世話になっている、尊敬する上司なの。それ以上でも以下でもない。宍戸君だって児島課長が部下思いの上司だって分かってるでしょ？ そんな児島課長に特別な感情なんて……」

「児島課長、児島課長ってうるさいですよ。運転に差し支えるので黙っていて下さい」

そう言った次の瞬間、感情のなかつた宍戸君の表情が揺れ、苛立ちが表れる。

「……だいたい今さら何言っても遅いんだよ」

宍戸君はゆっくりと駅前の駐車場に車を停め、サイドブレーキをかける。そして眼鏡を外すと、ダッシュボードの上に乱暴に投げた。

「……そうだろうなとは思ってたけど……カマかけたら見事に動揺して……」

「え？」

「クールに振る舞っているつもりかもしれないけど……隙だらけだ」

先ほど私を真っ直ぐに見据えた大きな目が、再び前髪の間から見え隠れしていた。

その長い睫に縁取られた瞳は、夜の光を反射させながら牙え牙えと澄み渡っている。綺麗な二重。そのすぐ上にはキリツと上がった眉があった。

いつもの宍戸君とは違う声色と、普段しつかりと見ることはない彼の目。それらに囚

われた私は、どこか危険な空気を感じながらも視線を離せない。

「今も隙だらけ。こっちは我慢してるのに、そんな顔をされたら襲ってくれて言ってるようなもんだ」

あ、と思った時には、私の肩はシートに押さえつけられていた。

穴戸君の顔が迫ってくる。そのあまりに綺麗な瞳に魅入られて、私は動けない。キスされる。そう悟った時、私は何を思ったのかバカみたいに目を閉じていた。

すると、私の肩を押さえる力が一瞬ぎゅつと強まり、その後ふつと弱まった。

思わず目を開けた私は、鼻先に迫った彼の大きな瞳と出会う。

その黒目がガラリと光り、彼の顔に傲慢な微笑が浮かぶ。私はやはりその顔から視線が離せない。

「ほら、隙だらけだって言っただろ」

穴戸君は笑みを湛えた唇で私の唇を奪う。

襲うというにはあまりにも優しいキス。意地悪な瞳で仕掛けられた、二度目のキス。

重なり合った部分だけが敏感になってしまったかのように、私は彼の唇の温度や繊細な皺、吸い込まれていきそうな柔らかさをまざまざと感ずる。

車内で自分の心臓の音だけが大きく鳴り響く。けれど、その高鳴りは次第に警告音に変わっていった。

いけない。このままじゃ完全に囚われてしまう。

体を捻って逃れようと試みた瞬間、そうはさせないとも言おうように彼のぬるりとした舌先が入ってきた。強気なキスが、脳を支配していた甘い薄霧を振り払う。

「な！　なんでっ！　な、なに」

また、またキスされた。そして私、またブーツとしてされるがまま……バカ、私、バカ！

穴戸君の大きな目が私の視線を絡め取る。私は顔が火照ってくるのを感じながら、感情を見せない目の前の男に怒りを覚えていた。

彼の腕から逃れた私は、思い切り彼の頬を張り倒す。

バチンッ！　乾いた音と、手のひらの痛み。

勢い余って放った私の平手打ちには、遠慮なんてなかった。

「あ……俺、やっぱ嫌われてんなあ」

穴戸君は小さく呟くと、薄笑いを浮かべる。

私はそんな彼の視線から逃れるように車から降り、走り出していた。

二度のキス。

マンションの自分の部屋に戻った私は、洗面所で化粧を落としながら鏡に映る自分の

唇を眺める。

たかがキス。高校生がふざけてするような、他愛もないキス。気にしないでおこうと思うのに、私はいつまでも自分の唇から目を離せずにいた。宍戸君の黒目がちの大きな目が、脳裏から消えない。

眼鏡越しではなく、初めて直接見た彼の瞳。透明感のあるその瞳は、反射鏡みたいに輝き、その向こうにある感情を隠そうとしていているようにも見えた。

私は洗面所から出ると、いつものごとくじゃむじゃむの腕を引つ張って抱きかかえる。幼児が毛布を抱いて安心するのと同じで、私もいつだってモフモフな毛並みで癒される。「キス……」

私は独りごちながら、自分の唇を人差し指でなぞった。

キスなんて、大学時代のコンパで酔っ払った知らない学生に冗談半分でされて以来だ。その時のキスは、唇を離れた途端に忘れてしまうようなものだったけれど、宍戸君の唇の感触はまだ私の唇の上にある。

私は蘇ってきた感触に、思わず足をバタバタさせてしまう。

全然好きじゃない男性に突然キスをされたのに、そのまま受け入れてしまった自分が情けなく恥ずかしい。二度目なんてキスされるのが分かっていたのに、目を瞑ってしまった。あれではキスを待っていたみたいじゃないか。

——そんなことない。あんな男、大嫌い。

そう自分に言い聞かせる私を、じゃむじゃむのプラスチックの目が白けたように見えて、思わず目を逸らした。

だいたい宍戸君だって、私と同じ気持ちのはずだ。二年半一緒に仕事をしてきて、意地悪を言われたことなら何度もあるけれど、好意を感じたことなどない。きつと嫌がらせだ。そうに違いない。

若い年なのにあれこれ指示する女上司をちよつとからかってやろうとか、そんなものなのだろう。そうでなければ、ただのキス魔とか？

けれど、あの強い眼差し……微笑を湛えた唇で……

「だあ！」

また思い出しかけて、私は思わずじゃむじゃむのお腹にパンチを入れてしまった。とんだ八つ当たりで、じゃむじゃむゴメンなさい——そう素直にぬいぐるみに謝ったところで、私は宍戸君に思いっきり平手打ちを食らわせてしまったことを思い出す。

男性とのお付き合いの経験すらない私なので、どんなに考えてみたところでその真意などよく分からないが、百パーセント嫌がらせだったとしても、やっぱり暴力はよくなかった。

しかも相手は勤め先の御曹司様。児島課長への想いまで知られてしまっているのだか

ら、歯を食いしばってでもキスの一つや二つ、我慢しなければいけなかったのだ。

じゃむじゃむのお腹に顔を押し付けモフモフしていたら、また宍戸君の大きな瞳が脳裏に蘇よみがえってくる。

怖いぐらいに深く澄んだ夜のような黒目、視線の鋭さを緩和かんわさせる長い睫まつげ。私はその記憶を打ち払うように、じゃむじゃむのお腹にポツンポツン頭突きした。うう……また八つ当たり。

よし、とりあえずキスのことはきっぱり忘れて、宍戸君に暴力を振るったことを謝罪しよう。

そう決めたはずなのに、目を瞑つむる度にまた彼の唇の感触を思い出す。

この夜、じゃむじゃむは私に何度もポツンポツンされたのだった。



謝らなければならぬと思いつつも結局何も言えず、何事もなかったかのように一週間が過ぎた。私は、宍戸君と目を合わせることでさえできずにいる。仕事中でもできる限り目を逸そらしている始末だ。

彼と目を合わせてしまうと、きっと私は長い前髪の奥に隠されている大きな瞳を意識

してしまっただろう。でも、そんなこと気付かれたら、キス一つで惚れたなんて誤解されかねない。

そんなのはまっぴらごめんだ。いくら私が彼氏いない歴イイ年キル年齢でも、最後にキスをしたのが六年前で、しかもそれが名前も知らない相手だったとしてもだ。

あんな傲慢ごうまん男、百回キスをされても土下座どげざで告白されても好きになるもんか。

そう自分に強く言い聞かせ、私は指を叩きつけるようにパソコンのキーボードを打っていく。すると、デスクに見慣れた大きな手が伸びてきて、ひょいとそこにあつた書類を掴んだ。

「花園、お客様アンケートの要望内容、エクセルで纏まとめてるのか？　そこまですななくとも一通り目を通して、ファイリングするだけでいいぞ」

アンケート用紙とパソコンのモニターを見比べてそう言ってきたのは、児島課長だ。

ソーションでは美容部員が百貨店のカウンセリングコーナーで接客する際に、お客様アンケートを実施している。現在百貨店の美容部員の取り纏めをしている私にとって、アンケート用紙の回収・チェックも仕事の一つだった。

児島課長は優しい顔で、私に向かって穏やかに微笑む。

課長はいつもこんな感じ。空に浮かぶ雲のようなフワフワした笑みを絶やさない人だ。

「纏めたってほどじゃないんですが……最後の、その他ご要望の欄の内容を並べてい

くと、お客様のニーズがリアルに出てくる気がするんですよ。BBクリームが爆発的に流行って以降、オールインワンコスメを求める声っていうのはすごく高くて……薬用リップにグロスの効果を加えて、さらに何かもう一つ付加価値を付けた商品があれば売れるんじゃないかな、なんて考えているんです。学生がポケットに忍ばせて気軽に使えて、なおかつ友達に見せたくなるような可愛いパッケージだと、受けると思うんです」

「薬用リップグロスか。花園は入社の時、マーケティング課に配属希望だったもんな。そういう着眼点はさすがだと思うよ。そのアイディア温めておけよ」

児島課長の笑顔は時に優しすぎて、受け止めることができない。私の視線は半ば無意識に彼の左手の薬指に向かった。

冷たく光るプラチナの結婚指輪。

——児島課長ですよ。止めた方がいいですよ。

耳の奥から声が聞こえた気がした。

ギュッと胸が締め付けられるように痛み、私は反射的に宍戸君のデスクに目を向ける。彼はそこで電話をかけていたが、一瞬眼鏡の奥から鋭い視線をこちらに向けてきた。

私はぼつが悪くて目を逸らす。

怒ってる？ 宍戸君、君は私に勝手にキスまでしておいて、怒っている？ 確かに私も叩いちやっつたし、しかもまだ謝ってないしで、怒られる要素を色々持ち合わせては

いるのだけれど。

「ああそうだ。一ヶ月ほど先に美容部員に向けての合同カンファレンスが仙台であるだろう。興味があつたら、一日出張になるけど一緒に来るか？ 担当地域以外の美容部員と会えるから、色々参考になる意見も聞けるだろう」

「え、あ、はい」

「じゃあ出張二名で申請出しておくから、予定に入れておいて」

課長はそう言いながら、自分のデスクへと戻っていった。

彼の広い背中を見送りながら、私は冷静でいようと努める。営業職なので出張は多いが、課長と二人で出張なんて初めてだった。情けないことに顔が火照ってくるのが分かる。気持ち落ち着かせようとデスクから離れ、今日の営業に持っていくサンプルを取りに倉庫へと向かった。

一人になって、大バカな自分を叱咤してこよう。

宍戸君に気付かれて忠告までされているのに、まだ私は課長に声をかけられると少女のように顔を赤らめてしまう。もっかい加減に気持ちの整理をつけたかった。誰にも言えない、実ることのない、やましいだけの恋なんて、痛み以外得るものはない。

備品倉庫に足を踏み入れ、私は段ボールの中から必要なテスターを取り出していく。頭を仕事モードに切り替えようと意識しているのに、気が付けばまた児島課長の優し

い笑顔を思い出す。それとセットで蘇るのは、宍戸君の冷たい視線。

何度目かのため息を吐き出した時、私は背後でドアの開く音を聞いた。振り向くと、宍戸君だった。

今一番顔を合わせたくない人物の登場に、思わず体が硬直する。

相変わらず前髪で顔が半分隠れて、表情は分からない。彼は「お疲れ様です」と静かに言った。

倉庫でばったり鉢合わせなんて珍しい……っていうか鉢合わせなのだろうか？ そんなに人の出入りのある部屋ではないので、このタイミグでバツリとなると、どうも追いかけてこられた気がしないでもない。被害妄想？ 自意識過剰？

「兎島課長と出張ですか？ 嬉しそうですね」

うん、被害妄想でも自意識過剰でもなかった。どうやら彼は、私に嫌味を言いたくてここまで追いかけてきたようだ。

「別に嬉しそうにやってみてません。仕事だから。宍戸君こそ何？ それが言いたくて倉庫まで追いかけてきたの？」

私は顔が引きつりそうになるのを抑え、淡々と返す。

「そんなに暇人ではないです、と言いたいところですが……この間の一件以来、花園主任が随分僕を避けているようなので、ちょっと二人で話をしたいと思い……」

そう言いながら一歩踏み出した宍戸君に怯み、私は思わず一歩下がる。

また一歩下がると、彼は二歩踏み出してきた。

一歩一歩距離を詰められるごとに、眼鏡で隠されている彼の瞳が視界に入ってくる。

顔、赤くなるな。心臓、鎮まれ。落ち着け、私！

私は自分を叱咤し、ギョツと唇を噛み締めて立ち止まると、彼にしっかりと向き直る。きつとこのキス魔は、どんな横暴を通して誰かに殴られた経験などないのだろう。

それでこれほどまでにお怒りなのだ。二人きりのいい機会だから、今さっさと謝罪してしまおう。

「あの、宍戸君」

私はクールな主任の仮面をしっかりとかぶり直し、出来るだけ冷静に話しかけた。

「はい」

「ごめんなさい……叩いちやったこと」

「痛かったですね。思いつき叩かれたので」

「暴力を振るったのは……悪かったと思ってるの」

眼鏡の向こうに綺麗な瞳があるのを知っている私は、いけないと思いつつも、彼の瞳を探してしまう。私の視線を遮るように、宍戸君の指先が眼鏡を少し持ち上げた。顔の角度が変わったその一瞬だけ、彼と直接視線が交わる。やっぱり綺麗な目だ。

そう感じた瞬間、もう彼の顔と相対する余裕などなくなっていた。私は何も言えずに目を伏せる。

彼の唇の感触を思い出す。ふわりと柔らかくて、陽射しを集めたような温かさ。

無意識に唇を動かしてしまっている自分に気付き、慌てて歯でそれを押さえ込んだ。

見られていませんようにとこっそり宍戸君を窺うと、また眼鏡の奥の大きな瞳と視線が交わった。

「キスは秘密の代償です。兎島課長との関係は誰にも言いませんよ」

「だから！ 兎島課長とは本当に何もなくて……ただ私が想ってるだけだから……」

「……そうですか」

宍戸君はそれ以上何も言わない。

言うべきことを言い終えた私は、その沈黙に耐えられず逃れるように部屋を出ようとした。

ドアノブに手をかけた時、金属製のドアがガチャンと激しく音を立てて、私の目の前で揺れる。

反射的に振り向こうとすると、宍戸君がドアに手をつけていた。私は中途半端に後ろを振り向きかけたまま、ドアと宍戸君の胸の間で、呆然と体を小さくする。

これが噂の壁ドンか。いや、この場合ドアドン？ ドアガチャン？

いやいや、そんなことどうだっていい。今現在重要なのは、迫ってくる宍戸君の顔をどうやって避けるかだ。

ああ、でも……こうやって近くで見るとやっぱりよく分かる。眼鏡の奥に隠されている綺麗な瞳。形のいい薄い唇。この唇が見た目以上に柔らかで優しいことを私はもう知っていて……

「想ってる」——そうやってポロポロと本音を言ってしまうところがムカつくんです」

「あ……」

「……ムカついて……我慢できなくなる」

宍戸君の低い声が耳のすぐ近くで響いた。唇が耳朶みみたぶに触れそうなほど近い。彼の息遣いまではっきりと聞き取れる。

我慢できなくなるってどういうこと？ 何をする気なの？

言いようのない息苦しさを感じながら、彼の唇を意識してしまう自分がいた。私の心臓の音は、最大限に高まっている。

大きく吐き出された宍戸君の息が私のこめかみを撫でる。続いて、押し殺した声が私の鼓膜を揺らした。

「……飯、奢おごって下さい」

「えっ？」

「殴ったことを詫^わびるなら奢^{おと}って下さい」

「……」

宍戸君は私から体を離すと口角を持ち上げ、どこか切なげに笑った。あまりに拍子抜けな要求に腰が抜けそうになった私は、ドアに体を預けながら嘩然と彼を見返す。

キスされると思った。そして私、また……抵抗できなかった？

そんな自分が情けない。それでも彼の眼鏡の奥にあるミステリアスな瞳^みについて魅入^いってしまっ。

高く鳴り続ける自分の鼓動を聞きながら、私は懸命にそれを否定しようとする。

ドキドキなんてしてない。きっと彼は私をからかっているだけ……そんな男にドキドキなんて……

私が唇を噛みしめていると、宍戸君はさらに追い討ちをかけてきた。

「今晚、花園主任が彼氏と行くようなお洒落^{しゃれ}なレストランにでも連れて行って下さい。七時半、角のコンビニ前でいいですか？」

いつの間にか食事に行くことが決定してしまったらしい。

「……宍戸君は、そうやって何でも自分の思い通りにしながら生きてきたの？」

「思い通りになったことなんて、何一つありませんよ。……ただ思い通りにすることを

諦めるつもりもないので努力はします。少々ずるい方法であっても――

彼は不思議な笑みと共に意味深なことを言う。その顔が仕掛けた罠^{わな}の出来に満足しているハンターのようにも見えた。

ここで彼に従うのは、罠に飛び込んでいくようなものなのかもしれない。でも今の私にノーと言える権限はなかった。あまりに大きな弱みを握られてしまっている。

私は覚悟を決めると、気弱になりそうな自分を叱咤^{しつた}して、また余裕のある、クールなビジネスウーマン^ンになってみせる。

「じゃあ角のコンビニ前に七時半。美味^{おい}しそうなレストラン、調べておくれ」

精一杯の威厳を背中に漂わせ、私は今度こそ備品倉庫から退出した。

九月二十六日。今日は私の二十八回目の誕生日。

誰かにお祝いしてもらおうなんて思っていなかったけれど、こんな風に宍戸君と食事に行くことになるなんて。

平静を装^{よそお}いオフィスに戻る私は、運命の夜が訪れようとしていることにまだ気が付いていなかった。

七時半、時間ぴったり待ち合わせ場所に到着すると、宍戸君は既にそこで待っていた。会社帰りなので、私はソーシヨ^ンらしい上品さを意識したOLスタイル、宍戸君は